

「県民力を高める絆づくり協創プロジェクト」 第3回推進会議の概要について

「県民力を高める絆づくり協創プロジェクト」の第3回推進会議を平成24年12月20日（木）に開催しました。

第3回推進会議には、7名の全委員にご出席いただくとともに、会議の進行を補助するファシリテーターとして特定非営利活動法人Mブリッジ理事長の米山 哲司氏にご出席いただきました。

なお、第3回推進会議の概要は、以下のとおりです。

「県民力を高める絆づくり協創プロジェクト」委員及びファシリテーター

※敬称略、50音順、カッコ書は役職

川北 輝（特定非営利活動法人津市 NPO
サポートセンター理事長）

小堀 正一（三重県視覚障害者協会会員）

高橋 幸照（水土里ネット立梅用水事務局長）

増田 正人（公益社団法人みえ犯罪被害者総合支援センター専務理事）

舛本 大輔（国立大学法人三重大学大学院教育学研究科特別支援教育専攻2年）

宮本 倫明（「美し国おこし・三重」総合プロデューサー）

和田 京子（特定非営利活動法人伊賀の伝丸代表理事）

＜ファシリテーター＞

米山 哲司（特定非営利活動法人Mブリッジ理事長）

＜推進会議の進行概要＞

会議の大まかな進行は以下のとおり

開会 9:30

戦略企画部副部長あいさつ

第2回推進会議の振り返り

プロジェクトの進捗状況に対する意見交換

- ・プロジェクトの進捗状況等の説明
- ・委員間で意見交換

参考事例を題材にした意見交換

閉会 12:00

（戦略企画部副部長あいさつ）

松本利治 戦略企画部副部長から、今回の会議では、これまでのご意見等に対して各課の事業にどう反映したかを説明させていただいたのでご意見をいただきたい旨あいさつをしました。

（第2回推進会議の振り返り）

ファシリテーターの米山さんから前回、第2回推進会議の概要を説明いただきました。

（プロジェクトの進捗状況についての意見交換）

各事業の課題、推進会議等での意見、推進会議等での意見を踏まえての事業内容を中心に各課から説明しました。

その後、推進会議での各委員の意見が反映されているのか、又はもっといい方法がないか、また、プロジェクト全体の目標であるアクティブ・シチズンや協創につながるものになっているかの観点から委員間で意見交換を行いました。



実践取組毎に整理した委員からの主な意見

【実践取組1】「次代を担う子ども・若者の県民力を高める仕組みづくり」

1 高等教育機関と地域との連携の仕組みづくり

学生がボランティア活動に参加するためには、ゼミの先生の影響が大きいので、ゼミの先生の理解を得ることが重要である。

高校生の時に地域活動を行っているとう大学生や社会人になってからも地域活動に積極的に参加してもらいやすい。

三重大学建築学科がメンバーのアジトというサークルに発表の場を提供したところ、愛知トリエンナーレ、アート亀山などから声がかかるようになった。学生が発表する場、チャレンジする場を作ってあげれば学生は伸びていく。

学生への周知方法については、実際に大きな課題なのでしっかり取り組むべきである。

学生生活4年間のうちボランティア活動に参加できる期間は、2年間から3年間であり、学生の意識向上につながる取組が必要である。

2 子どもたちと取り組む農村の地域資源保全活動

NPO、企業と連携した活動の質的向上が課題である。

徳島県の中山間地域の活性化に関する事業で「ふるさと応援したい受入事業」が参考になる。企業、大学、NPOが共同パートナーになり、また受け皿となる団体がふるさと団体となって、積極的に交流促進を行っている。

3 若者が参画する犯罪に強いまちづくり
学生のボランティア活動の参加については、先生など核となる人材が重要であり、そのような核となる人材の育成が必要である。

予算のつかないから事業が終了するというのではなく、予算がつかなくても活動が継続できるような仕組みが必要である。

犯罪被害者等支援については、例えばパンフレットの活用方法等、啓発の仕方が分かれば、民間での啓発も行いやすい。

【実践取組2】「さまざまな事情で支援が必要な県民の皆さんの能力発揮・参画の支援」

1 外国人住民の地域社会への参画の促進
人口に占める外国人の比率については、東京、愛知に次いで三重が全国第3位である。推進会議でのコーディネーターの存在が重要との意見を受け、多文化共生課の事業では、25年度当初予算要求で災害時外国人サポーター研修を受講した方を対象にコーディネーター養成の事業を要求しているが、サポーター研修受講者だけを対象とするのではなく、もっと門戸を広げてもらいたい。

外国人児童生徒の日本語で学習する支援

の事業については、そのために割り当てられている加配教員を外国人児童生徒の支援に関わっていくようすべきである。各地域でアクティブ・シチズンを支えることが出来るコーディネーターの存在が重要である。

- 2 障がい者等の地域社会への参画の促進
- 第1回芸術文化祭の開催については、評価すべきである。芸術文化祭に取り組んだ結果、団体に所属されている方には、芸術文化祭の周知が出来たが、団体に入っていない個人の方への周知が課題となっている。
- どうしたら、参加出来て、個人個人のもつ実力を発揮することができるか、また参加することで社会とのつながりが出来るのかの説明が大事である。
- 学生時代に社会との接点について啓発、教育していく必要がある。
- 第2回芸術文化祭に向けては、セミナーの開催など芸術に関する自己の能力に気付いてもらう機会を設ける必要があり、そうすることで一般展の参加にもつながっていく。
- 「三重思いやり駐車場制度」については、制度について浸透させるため、周知が必要である。

【実践取組3】『『美し国おこし・三重』の新たな展開』

「美し国おこし・三重」実行委員会は、経済団体の代表等で作られているが、企業とのつながりがなかなか進んでいない。企業ともしっかり積極的につながっていくことを方策として考えていくべきである。コーディネーターの必要性について、「美し国おこし・三重」では、四日市、津、松阪、伊勢志摩について地域の間

支援組織にプロデューサー業務の移管を行っているが、経験の少ないプロデューサーもいるため、プロデューサーのスキルアップ、チーム力のアップに向けて取り組んでいく必要がある。

来年度予算について、「美し国おこし・三重」もかなり厳しい状況で、この会議でも必要性が指摘されているコーディネートを行うプロデュース業務の予算も削減するという話が出ている。その削減した部分を、例えば東紀州地域の間支援組織に向けるとか、人材育成に注力するような検討が必要である。

【実践取組4】「NPOの活動を支える仕組みづくり」

NPOと企業がつながる仕組みも必要であるが、NPO同士がつながる仕組みが必要である。

（参考事例を題材にした意見交換）

地域活動や社会活動の参画の拡大など協創を推進するため、参考となる3つの事例を題材に委員と行政職員がグループに分かれて意見交換を行いました。

【事例1】千葉コラボ大賞

NPOと企業・学校などの連携事業を募集し、模範となるような事例を千葉県知事が直接表彰する制度

【主な意見】

- ・評価されることでNPO等地域で活動している団体のモチベーションが上がる。
- ・知られることで活動の広がりにもつながる。
- ・企業の参加意識アップにつながる顕彰する仕組みは、取り入れたい。
- ・異なる取組の評価の基準、効果の判断などグループの活動に優劣をつけるのは難しい。

- ・こういう取組で違うテーマが集まることで気付きにつながる。
- ・表彰は一過性に終わってしまうのでモチベーションを継続して活動してもらうことも必要ではないか。
- ・企業のモチベーションアップにつながる。
- ・地域思いビジネスや地産地消大賞など他の表彰制度をまとめて、お祭のようにやってみようか。
- ・表彰する際には、テレビの取材をしてもらえよう情報発信の仕方を工夫しないと誰にも知られないことになる。

【事例2】 NPO法人学生人材バンク
 事前に登録した学生の携帯に、ボランティア情報を配信する仕組みが、鳥取県で実施されている。鳥取の大学生の多くが登録している。地域からの情報の質の向上にも努めている。ボランティアに興味があるが実際の活動はしていない学生に参加してもらえよう工夫している。

【主な意見】

- ・学生が普段から使用している携帯を利用したの情報提供システムであり、ボランティア活動の参加のきっかけとして活用できる。
- ・ボランティアをしたいと思っている学生にとっては、情報を得られやすくなり良い。
- ・ボランティアを受け入れる側の意識向上にもつながる。
- ・学生から地域への情報提供をしていくことも必要。
- ・1回限りのボランティアでなく、継続的な活動をしていく際には、工夫が必要。
- ・学生とまちづくりをつなげる視点は必須である。
- ・サークルと地域の合宿の情報を提供することも出来るのではないか。
- ・学生のなかでコーディネートする存在が重要だ。

【事例3】 株式会社デンソー

デンソーグループ社員行動指針に基づきCSRを通じた社員のボランティア活動を支援。社員が地域活動に携わることを会社が支援することは会社の責任であり、社員の人間的成長につながり、ひいては、会社の業務の反映にもつながるとの考えのもと実施されている。

【主な意見】

- ・企業人としてだけでなく、一個人として地域活動に参画するきっかけとなり、地域活動の参画者の増大につながる。
- ・社員が色々な方法でボランティア出来る仕組みになっているのは良い。
- ・企業と地域をつなぐ仕組みとなっている。
- ・一過性に終わらないようにしていく必要がある。
- ・CSRについては、企業間で温度差があるのでどのようにそれを解消していくかが課題である。
- ・社員で情報共有されていることが素晴らしい。
- ・本業にメリットのある社会貢献の仕組みを仲立ちする人が必要ではないか。



次回（第4回）の開催予定

次回（第4回）推進会議は、2月下旬から3月下旬頃に公開で開催する予定です。